

平成19年度図書館情報学海外研修助成報告書

図書館情報専門学群3年 池田真知子

1. 研修の目的、概要

中国の図書館について理解を深め、中国の図書館の今後の動向について、日本の図書館との相違点について学ぶ。国際交流協定先でもあり、中国を代表する中国国家図書館、北京大学図書館、上海図書館の3つの図書館を見学することとした。

2. 訪問先、日程

訪問先

- ・ 中国国家図書館
北京市海淀区中関村南大街 33 号
- ・ 北京大学図書館
北京市海淀区北京大学図書館
- ・ 上海図書館
上海市淮海中路 1555 号

日程

北京 7月2日(月)～7月7日(土)

7月2日(月)	日本発北京着
3日(火)	中国国家図書館
4日(水)	中国国家図書館
5日(木)	予備日
6日(金)	北京大学図書館
7日(土)	北京大学図書館

上海 7月27日～30日

7月27日(金)	上海着
28日(土)	上海図書館
29日(日)	予備日
30日(月)	上海発日本着

3. 各図書館での研修

7月2日（月）

日本を出発する。午前有成田を発ち、午後北京に到着。空港到着後、北京市内のホテルに宿泊。

7月3日（火）

中国国家図書館を見学。

中国国家図書館

北京市の北西部に位置し、アジアで最大、世界で5番目に大きな国立図書館である。前身は清代1909年に成立した京師図書館である。1911年辛亥革命によって清国崩壊後、北京政府教育部の管轄下に置かれる。1928年中華民国が南京に首都を構えた際に国家中央図書館が設置され、北京の図書館は‘北京国家図書館’と名称を変えた。1949年中華人民共和国が成立すると南京の図書館は台北へと移った。1983年には北京北郊に巨大な新館が建てられた。敷地面積7.4ヘクタール、建築面積14万平方メートル、地下地上書庫19階、地下書庫3階、合わせて2000万冊を収蔵可能である。閲覧座席は3000席、毎日の利用者は平均7000人である。中国図書館協会の事務所もあり、出版社も敷設されている。1998年に名称を‘北京国家図書館’より‘中国国家図書館’に改める。蔵書は2400万冊、毎年60-70万冊ペースで増加している。3000年以上前の亀甲資料3.5万点、拓本7.8万セット、古代地図6万点、敦煌資料5万点、その他にも少数民族図籍、革命歴史文献、著名人の直筆原稿など中国随一のコレクションを誇る。目録の機械化には1970年代より取り組み、1988年には中国マークを開発し、国内のデジタル化計画を先導している。本館と古籍館よりなる。本館は地上19階、地下3階合わせて2000万冊収容可能の書庫を有する。蔵書は約2400万、毎日の利用者は約1万人である。また2008年にはデジタル図書館が開館予定。

開館時間

月一金 9:00-21:00

日一土 9:00-17:00 利用者

18歳以上成人（中国の成人年齢は18歳）

貸出冊数上限、期間

中国語図書 3冊

図書付属のCD 3点

外国語図書 3冊

1ヶ月

延滞には中国語図書0.3元、外国語図書0.5元が課せられる。

貸出中の図書について予約ができる。



図書館の正門にあたる東門は地下鉄工事のため、南門へ迂回して入館した。図書館の利用者は入館には必要最低限の荷物以外は持ち込むことができない。ビニール袋に入れた荷物は持ち込み可のため、それ以外は館外の荷物預け場所で、荷物を預ける。荷物の預け料金として0.5元払う。中国国家図書館では利用証の発行には身分証明証、手数料、(保証金)が必要である。利用証には種類があり、支払う手数料、(保証金)、また利用できるサービス、閲覧できる資料、貸出しできるか否か、閲覧できる資料などの点が異なっている。簡単な申請表に記入をして、顔写真を撮影し、普通閲覧室が利用できる利用証(5元)を作った。利用証には顔写真はのっていないが、必要に応じて認証ができるようにデータをとっているようだった。

7月4日(水)

中国国家図書館 定期刊行物・電子リソース・視聴覚資料部門主任 王志庚さんにお話を伺い、館内を案内していただいた。

館内について(館内図参照)

◎1,2階

図書館の入り口を入ってすぐ階段があり、2階に上がるような設計になっている。階段の手前右側に書店がある。中国国家図書館には中国図書館協会の事務所、出版社が設けてあり、書店で関係書籍も販売している。階段を上がるとホールにでて、その突き当たりが貸出しカウンター、総合案内カウンターである。総合案内カウンターでは館内案内から資料についてのレファレンスも行っており、職員2人がOPACとインターネットを駆使して対応していた。ホールにはOPACが20台ほど設置しており、利用者はここで資料の検索、請求ができる。

電子閲覧室

インターネットが有料で利用できる。

善本閲覧室

善本、善本のマイクロフィルムが閲覧可能。本館では善本のみを所蔵しており、普通古籍は古籍館にて所蔵している。土日は閉室する。

科術諮詢室、社科諮詢室、法律諮詢室

それぞれ科学、社会、法律の分野で専門的なレファレンスを行う。

◎4階

日本出版物文庫閲覧室

外国語の閲覧室は他にもあるが、ここでは日本の資料が1部屋占めている。この資料の多くは出版取次会社の日販が毎年寄付している。ほとんどが実用書で文芸書はあまり目にしなかった。寄付のためどのような基準で選書されているのかがはっきりしないようだった。

台港図書閲覧室

台湾、香港で出版された図書が所蔵されている。

音像資料第一・第二・第四視聴室

DVD、ビデオ、CD、カセット、レコード等の視聴覚資料が利用できる。

中国国家図書館の定期刊行物・電子リソース・視聴覚資料部門主任の王志庚さんにお話を伺った。また日本図書館を担当されている韓恵さんが館内を案内してくださった。

デジタル図書館について

2008年に80,000平方メートルの新館のデジタル図書館が完成予定である。2008年には120テラバイト、2010年には340テラバイトのデータが提供できるようになる。現在は古書を中心にデータ化を進めているが、新書についても業者が図書館に代わり著作権の処理を行うことでデジタル化を進めている。特にマイクロフィルムは優先的にデジタル化している。資料は主題別にデジタル化している。資料の提供については、デジタル図書館の新館が完成後にはデジタル資料はその館内のみの閲覧にする予定である。2008年の北京オリンピック前の開館のため急ピッチで作業を進めている。

RFIDについて

RFIDは2008年導入予定である。館外貸出し対象の図書30万冊に導入する予定であるが、数が多いために作業は困難が予想される。

図書の貸出しについて

北京にはまだ図書館が少ないために、中国国家図書館としても貸出しが必要な状況である。文学を中心に約30万冊を館外貸出ししている。中国国家図書館には納本制度があり、一般書は3冊納本するが、貸出し対象図書は6冊受け入れる。この6冊のうち、3冊は保存であり、残り3冊のうち、1冊が貸出し、2冊が副本となる。現在、毎日の利用者は約1万人であるが、5年前までは土日は閉館していた。土日開館の要求が高まり、土日も開館するようになったという経緯がある。

レファレンスについて

利用者が来館してカウンターでレファレンスを行う以外に電話、インターネットでもレファレンスを受け付けている。インターネットでのレファレンスはバーチャルレファレンスと呼ばれ、メールとチャットを利用して行われる。チャットのレファレンスは決まった時間に職員が対応する。利用には登録が必要であり、利用者は専用ウィンドウでメッセージを送受信する。現在は9-11時、14-16時に14名の対応要員で対応している。質問を入力する際にどの分野の質問か入力する欄があり、それによってそれぞれ専門の異なる対応要員のうち、誰が担当するかをコンピューターが割り振りする。実際にチャットのレファレンスを見学したが、とてもスピーディに処理されていた。現在、メールとチャットのバーチャルレファレンスで1日100件ほど受け付けている。

有償レファレンスについて

文献の提示のみだけでなく、利用者が調査・比較・検討などを希望する場合に有償でこれらのレファレンスを行っている。文献の収集、規格、法律、マーケティング、科学、農業についてのレファレンスが多い。費用は調査前予想される金額を提示し、また調査後に費やし

た時間、使った資料の分量、結果の分量を吟味して算出する。

図書館員について

現在、約 1300 人の正規職員、約 600 人の非常勤が中国国家図書館で勤務している。1998 年より終身雇用ではなくなったため正規職員は 3 年、非常勤職員は 1 年契約での勤務である。非常勤職員は専門的な仕事ではなく、図書館を維持するための仕事、清掃、本の装丁、補修、貸出し図書処理などを担当している。正規職員は専門的な仕事を担当するのだから、中国には司書の資格が現在はない。中国国家図書館で働く正規職員の中で図書館学が専門だった者は少数であり、多くはまったく別の専門である。それなので、正職員採用後 3 ヶ月は図書館学について学ぶこととなる。中国国家図書館には専門的な知識も必要とされるため、図書館学以外の専門が重視されるが、地方の図書館では任される仕事の範囲が広いため図書館学の知識は必須である。現在、政府に司書の資格を設けるように提言している。

中国国家古籍保護センターについて

図書館、博物館、個人等の古書を所有する組織などが共同で横断的 OPAC を作成するという計画がある。

7 月 3 日 (火)

北京大学図書館を見学。

7 月 4 日 (水)

北京大学信息管理学部 李常慶先生にお話を伺い、北京大学図書館を案内していただいた。

北京大学図書館

北京市。中国で指折りの大学図書館である。1898 年に北京大学の前身京師大学が設立され、1902 年中国で最も早くできた現代的な図書館のひとつ。辛亥革命後に京師大学が北京大学となるに併せ、北京大学図書館と改称した。1918 年に中国共産党設立者でもある李大釗によって図書館の近代化が進められ、またこの頃に毛沢東も図書館の助手を務めている。蔵書は 600 万点、古書籍 150 万点、拓本 2.4 万点、その他にも外国語の古書籍などを所蔵する。1998 年にそれまであった西楼に合わせ、新館東楼が完成し、地下 2 階、地上 6 階建ての本館となった。建築面積は 5.3 万平方メートル、館内には 21 の閲覧室があり、座席数は 4000 席。館員は 300 人おり、年間貸し出し冊数は 120 万冊を超える。2000 年に北京大学は北京医科大学と合併しており、この図書館とはまた別に北京大学医学図書館もある。

開館時間

月～金 8:00-22:00

土 9:00-12:00

日 9:00-21:00

自習室は毎 6:30-22:30 (土は 17:00)

利用者

北京大学の学生

(学外者の利用には手続きが必要)

貸出冊数上限、期間

1人20冊まで、1ヶ月

インターネット上での資料の予約も可能

延滞した場合には1冊につき0.2元の罰金が課せられる。



図書館の入館には学生証、もしくは許可証が必要であり、図書館入り口には警備員が立っており、駅の改札機のような形の機械に学生証を読ませることで入館できる。入り口を抜けるとまず吹き抜けのホールにでる。北京大学図書館の本館はホールを挟んで東棟、西棟が位置する。ホールは天井までの吹き抜けになっており、太陽光が取り入れられ、明るい印象を受ける。ホールには貸出カウンター、総合案内カウンター、コンピュータ端末が設置されている。貸出カウンター前には60台のコンピュータが並び、有料でインターネットに接続できる。その他にOPAC端末も設置されている。蔵書については80年代以前の資料でまだデータベース化されておらず、目録カードで検索する資料もあり、データベース化が進められている。

利用者は各閲覧室に入室するには最低限の荷物しか持ち込みできない。館内閲覧室前にはロッカーが設けてあり、入室前に荷物を預けるようになっている。また各閲覧室入り口でも学生証のデータを機械によませなければ入室はできない。

各閲覧室には閲覧席が設けてあるが、各階の閲覧室外にかなりも数の自習スペースが設けてある。多くの学生はこの自習スペースを利用している。

◎5階

アメリカ文献センター・台湾文献センター

アメリカ、台湾の文献について扱う。

◎4階

定期刊行物閲覧室

世界各国の定期刊行物が所蔵されている。

港台新聞雑誌閲覧室

香港、マカオ、台湾と海外で出版された定期刊行物、新聞について閲覧できる。

◎ 3 階

学位論文閲覧室

北京大学の修士論文、優れた学士論文、また燕京大学（1952年に北京大学と合併）の卒業論文が閲覧できる。

新書閲覧室

新しく入った本が閲覧できる。

地方誌

1949年以降の中国の地方誌の出版物が閲覧できる。

自然図書貸出閲覧区

1990年以降に出版された中国語、外国語の理系の図書の開架貸出閲覧区。

◎ 2 階

人文社科図書貸出閲覧区

1993年以降に出版された中国語、外国語の文系の図書の開架貸出閲覧区。

文学図書閲覧区

中国語の文学図書の開架貸出閲覧区

◎ 1 階

総合案内

総合カウンター

コピー室

館内での複製はここのみで扱い、職員が複製作成を行う。

古籍・貴重書閲覧室

善本、古籍、拓本が閲覧できる。利用は教員と院生とされている。

視聴覚室

中国、海外のカセット、ビデオ等の視聴覚資料を所蔵し、各メディア複製サービス、音楽・映画鑑賞会などを行う。インターネット普及により最近では利用者が減少している

7月27日（金）

北京を立ち、上海に到着し、市内のホテルに宿泊。

7月28日（土）

上海図書館を国際交流所所長の沈麗雲さんにお話を伺い、館内を案内していただいた。

上海図書館

上海市。中国最大級の公立図書館である。1952年に設立、1958年に上海市科学技術図書館、歴史文献図書館、新刊図書館と合併。1996年に現在の所在地に移転、上海図書館として1997年に開館した。敷地面積3.1ヘクタール、建築総面積8.3万平方メートル、タワー2棟と5階建ての建物からなる。各種閲覧室、専用室32室、閲覧座席数は3000席を超えている。その他にも教育訓練センター、大型、中型展示ホール、講演会場、コンベンションホール、音楽鑑賞ホールといった施設が完備、また身障者の利用も考慮されている。コンピューター管理システムを導入しており、館内700箇所以上の場所でインターネットも利用可能。毎日の平均利用者は平均2700人。また各種書誌、参考図書を編纂していることでも知られており、「中国近代現代叢書目録」「中国古籍善本目録」などがある。蔵書は約2200万点。中国語図書240万点、中国語線装本170万点、定期刊行物2.1万点、地図1.4万点、その他地方誌、電子資料、論文等多くの資料を所蔵する。

開館時間

毎日 8:30-20:30

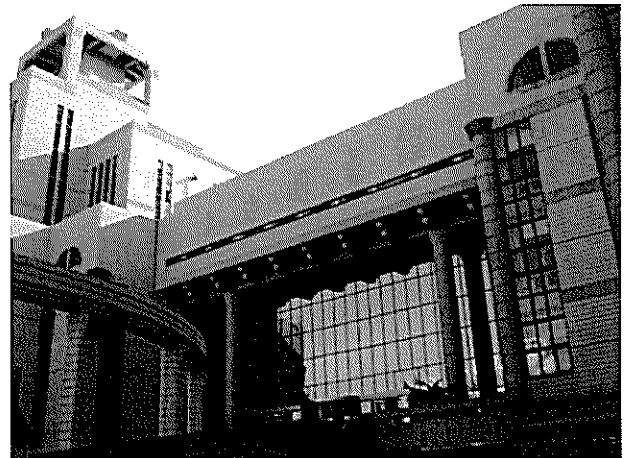
利用者

誰でも利用可能

貸出冊数上限、期間

5冊、28日

延滞は1日につき0.2元課せられる。



上海図書館の横に地下鉄10号線の駅が建設中で図書館前の広場は半分ほど柵に覆われていた。完成すると図書館すぐ横に地下鉄の駅ができることになり、図書館へのアクセスがよくなると期待されている。上海図書館で一般利用者が利用できるのは地下1階、地上4階建ての建物である。外から見るとまず目につく2つのタワーは6-23階が閉架書庫となっている。1階のホールが1階から4階までの吹き抜けになっており、明るく、開放的な雰囲気である。館内にガラスが多用されているようだった。沈さんが4階から順番に案内してくださった。

館内について

◎4階

外国語新聞室・外国語雑誌室

各国の主要新聞紙・雑誌が収集されている。新聞に 70 種に及ぶ。多くの新聞は 1 日遅れで入ってくる

日本語、ロシア語資料閲覧室

外国語の資料として日本、ロシアの資料が多く収集されている。日本の資料は経済、社会学、政治、福祉、文化を中心に収集し、特に経済に力を入れている。小説も所蔵しているがほとんどは寄贈されたものである。書架にある本は 4 年経つと閉架書庫に移される。現在、開架となっているもので日本の資料が 2 万点、ロシアの資料が 6000 点であり、閉架には 30 万点の日本の資料が所蔵されている。

万博情報閲覧室

2010 年上海万博に向けて関係資料、過去の万博に関する資料が閲覧できる。

◎ 3 階

3 階自然科学文献閲覧部

自然科学に関する文献が閲覧できる。

中文科学技術図書閲覧室

5 年以内に出版された中国語の科学技術に関する図書。

中文科学技術定期刊行物閲覧室

2 年以内の中国語の科学技術の定期刊行物。

3 階視聴覚部

小ホール

収容人数 60 名ほどの小さなホール。ちょうど中国軍隊創設 80 周年記念イベントが開かれていた。

図書文化博覧ホール

展示をするホール。ちょうど絵本の展示があり、子どもの描いた絵が展示されていた。

◎ 2 階

古書室

線装本は 170 万冊以上あり、そのうち 17 万冊が善本である。

家譜室

家系図が閲覧できる。世界で最も多く中国伝統的な家系図を有していることで有名である。現在約 1 万 5 千点の家系図があり、そのうち 4000 点のデジタル化がなされ、パソコン画面上で閲覧できる。残りすべての家系図について 10 年計画でデジタル化していく予定である。

◎ 1 階

中国語資料貸出室

中国語の一般資料が貸出できる。開架式書架になっている。2003 年より流行した SARS 対策として資料を消毒するスペースがある。電話ボックスのような形をしており、当時は貸出する資料はここで消毒を行っていた。現在は使用していない。

展示ホール

展示のできる大きなホール。ちょうどE Uに関する展示を行っていた。この展示ホールの隣が4階までの吹き抜けのホールとなっているので開放感のあるスペースとなっている。以前は、展示のカタログとして冊子体のカタログを製作していたが、現在ではコンピューターを用いている。展示のパネルの横にコンピューターを設置してカタログ情報が閲覧できるようになっている。

上海図書館書店

上海図書館の出版物やみやげもの等も販売している。

閉架資料の出庫

閉架書庫から1階カウンターに資料を運ぶのに資料専用のリフトを使用している。資料請求があると資料は専用の箱に入れられ、その箱が閉架書庫とカウンター間を結ぶリフトに載せられてカウンターに届く仕組みである。この設備はドイツ製のものであり、フランス ポンピドゥーの図書館にも取り入れられている。

利用証の有効期限1年について

利用証には期限を設けないのが一般的であるが、上海図書館には学生の利用者が多く、卒業すると上海を離れていくことが多く、利用者数の把握、管理のため、利用証を1年ごとの更新制度にした。

有償サービスについて

新聞の切り抜き、翻訳、ホームページ作成、広告作成、資料収集などを行っている。1995年に上海図書館は上海科学技術情報研究所と合併したために、このようなサービスも行っている。

インターネットの活用

上海図書館でもインターネットを利用したレファレンスを行っている。メールとチャットを利用したレファレンスである。メールの場合、インターネット上に紹介されているレファレンス対応職員の専門分野を利用者が考慮し、どの職員に質問するか選んでメールを送るという形である。回答は原則的に開館日2日以内に返答する。チャットでは決められた時間に（毎日9:00-11:00/14:00-16:00）職員がMSNのチャットで質問に回答していくものである。メールでの質問に関しては上海図書館だけではなく、協定を結んだ他館へも質問ができる。現在は香港、無錫、マカオの図書館やシンガポール国家図書館、米ニューヨーククィーンズ公共図書館など国外への図書館とも協定を結んでいる。インターネットのレファレンスは利用証がなくとも利用可能である。

また上海図書館で開かれる各種講座に関する予約もインターネット上で申し込みを受けし、インターネット上のバーチャル展覧会などインターネットを積極的に活用している。

デジタル資料

所蔵資料のデジタル化を進めている。著作権の処理は業者に委任している。一部の図書についてはコンピューター端末に対応するソフトウェアをインストールすることで館外でも閲

覧可能である。館外での閲覧では事前に申し込みが必要である。「電子図書が貸出しという形で5日間利用できる。電子図書の利用冊数上限は2冊。利用期間を過ぎると電子図書は自動的に返却される。」はつきりと確認はできなかったが、ソフトウェア内に電子図書のデータが貸出しとして、提供され、5日後にデータが消去されるものと推測される。

7月30日（月）

上海を出発。午前中に発ち、午後には日本に帰国した。

4. 研修を終えて

3つの図書館を見学して最も印象的だったのは、積極的にデジタル化を進め、インターネットを活用していること点だった。どの図書館でも蔵書をデジタルテキスト化し、コンピューター端末で閲覧できるようになってきている。2008年には中国国家図書館にデジタル図書館という新館が誕生する。上海図書館では一部のデジタルテキストを“貸出し”という形で館外のコンピューター端末からも閲覧できる。デジタル化に際して著作権の問題で考慮すべき点が多い。しかし、一方でデジタル化が進むことで今まで図書館でまったく利用されてこなかった資料の利用が増えるということもある。原本だと一般の利用者に提供が難しい善本、拓本などの貴重な資料もデジタル化することで提供しやすくなり、利用もされやすくなる。どの図書館でも古籍などを著作権が問題にならない古い資料を中心にデータベース化、デジタル化の遡及入力に取り組んでおり、今後提供できる資料に幅が広がることが期待される。

またインターネットの活用として特徴的だったのは、インターネット上のチャットでレファレンスを受け付ける取り組みである。日本でもインターネット上で在架状況の確認、資料の予約、メールでのレファレンスは行われている。しかし、日本ではインターネットを便利なものと認める一方で、その弊害が取り上げられ、インターネット活用に対してとても慎重である。それに対して中国はインターネットの活用に対して積極的であると感じた。今後、中国がどのように取り組んでいくのか興味深い。

中国では莫大な人口でありながらも文化施設の数が不足している。中国の経済発展は著しく、生活水準の向上とともに文化施設の充実が求められ、これから図書館への需要も固まっていくものと思われる。しかし、現状では図書館の数が少ないために中国国家図書館では、娯楽的要素の強い図書30万冊の貸し出しを行っている。国立図書館としての機能を考えればふさわしい業務ではないだろう。中国に司書資格がなく、図書館職員は働きながら図書館学を学び、身につけていくという状況を鑑みても現状では図書館学がとても重視されているというわけではなさそうだ。政府は、これから図書館を市町村単位で設置する計画であるという。過渡期にあるといえる中国の図書館の動向に今後も関心を持っていきたい。

5. 最後に

今回、図書館を見学するにあたって、それぞれの図書館で先生や職員の方のお話を伺う機会を得た。実際に見学してみるまでは、さほど日本の図書館と違いがないのではないだろうかと思っていたが、日々現場に接している方の話を聞くことで思っていたよりも日中で異なる点が多いことに驚かされた。また、日本の図書館と中国の図書館を取り巻く環境がまった

く異なる中で、お互いに比較してみることでそれぞれの現状、問題点がよりはっきりして、漠然とながらもその概要をつかむことができたと思う。お忙しい中、図書館を案内し、お話をしてくださった先生、職員の方々には感謝の思いで一杯である。このような得がたい経験をできたことに感謝し、これからは活かしていきたいと思う。